

Title	幼児期における死の概念の発達的变化
Author(s)	辻本, 耐
Citation	大阪大学教育学年報. 2010, 15, p. 57-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10574
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

幼児期における死の概念の発達的变化

辻 本 耐

【要旨】

本研究の目的は、幼児期における死の概念の発達的变化を実証的に明らかにすることである。3歳から6歳までの192名の子どもを対象に個別面接を実施し、不動性（死んだら機能が停止する）、不可逆性（死んだら生き返らない）、普遍性（誰でも死ぬ）の3つの死の概念に加えて、死後観および死に対するイメージについて調査を行った。その結果、「死んだら生き返らない」という不可逆性の概念は、4歳前後から獲得されていること、5歳から6歳にかけての時期に、生と死が弁別された表現を使用するようになり、「悲しい」、「イヤ」といった否定的な感情を含めた包括的な理解がとくに進むことが示された。また、死の概念と死後観および死のイメージとの関連を検討した結果、死の概念と死後観との間に積極的な関連はみられなかったが、とくに普遍性と否定的な感情表出との間に強い関連が認められた。この結果から、子どもの死の概念獲得を理解するうえで、感情的な側面が重要な指標となることが明かとなった。

1. 問題と目的

過去、中学生による殺人事件など未成年者の凶悪犯罪が起るたび、「いのちの教育」に注目が集まり、子どもが「いのちの尊さ」を理解しているかどうかについての様々な調査が行われてきた。近年、ゲームなどの影響により子どもが死を現実的なものとして理解していないという議論もあったためか、とくに「いのち」の否定的な側面である「死」に対する理解に注目が集まっている。

例えば、2004年に、長崎県教育委員会が『「生と死」のイメージに関する意識調査』として、小学校4年生と6年生、中学校2年生の計3600人を対象に大規模な調査を行った。その結果、「死んだ人が生き返ると思いますか」との質問項目に対して、「はい」と回答した児童・生徒は小学4年生で14.7%、小学6年生で13.1%、中学2年生で18.5%、全体では15.4%の子どもが「死んだ人は生き返る」と回答したと報告しており、中学生の割合が最も高くなっている。このように、死んだ人が生き返ると答えた子どもが少なからずいることから、子どもがいかにして死を理解していくのか、その発達過程を明らかにしていく必要がある。

死に対する子どもの理解を検討する際には、「死んだ人は生き返らない」といったように死の特性を概念化して調査が行われてきた。その死の概念として広く調査されてきたのは、不動性（cessation, non-functionality, finality）、不可逆性（irreversibility）、普遍性（universality, inevitability）、原因性（causality）、必然性（personal mortality）の5つの死の概念である（Speece & Brent, 1984, 1992）。不動性とは、生命を維持するための全ての機能が停止すること、不可逆性とは、一旦死ぬと生の状態には戻らないということ、普遍性とは、生物にとって死は避けられないものであるということ、原因性とは、死をもたらす要因のこと、必然性とは、自分自身を含めた全ての生物が死ぬということを表している。

そして、子どもが何歳頃ほどの概念を獲得するかについては、調査方法や質問項目の差異により、統一的

な見解は示されていないものの、5歳から7歳の間に不動性、不可逆性、普遍性といった死の概念を獲得し(Lansdown & Benjamin, 1985; Speece & Brent, 1984)、10歳までに全ての概念を完全に獲得するのが一般的とされている(Brent & Speece, 1993; Speece & Brent, 1992)。また、80年代前半から発表された子どもの死の概念に関する研究をレビューしたKenyon (2001)によると、普遍性と不可逆性については比較的早い時期に、不動性や原因性については前者よりも遅い時期に獲得されると述べている。しかし、死の概念獲得の時期は文化的・社会的要因によって変化しうるものであり(Wenestam & Wass, 1987; Schonfeld & Smilansky, 1989)、これまで中心に研究が行われてきた欧米以外においても研究が進められることが望まれる。そして、わが国では子どもの死の概念の獲得過程に焦点を当てた研究はこれまで多くはなく、幼い子どもを対象とするなど、さらなる研究が必要である。

加えて、これまでの日本の先行研究においては、例えば「死んだら動くのか、動かないのか」もしくは「死んだら生き返るのか、生き返らないのか?」という問いに対して、「はい」そして「いいえ」という2件法によって検討されてきたものが多く、問題点が残されている。つまり、発達過程にある子どもの場合、「はい」、「いいえ」では割り切れないグレーゾーンを有している可能性が考えられる。例えば、「人はいつか死ぬが、自分や自分の家族は死なない」、「人は死んだら生き返らないが、TVのヒーローは生き返った」といったように例外となる対象を有している場合や、「死ぬのは病人だけだ」といったように対象を限定している場合が予想される。

こういった問題点を解決しているのが、構造化面接のためのフォーマットであるDevelopment of Death Concept Questionnaire (DDCQ)である(Smilansky, 1987)。このDDCQは、不動性、不可逆性、普遍性、原因性、年齢の5つの死の概念を含み、人間と動物の死の概念について各13項目、計26項目により構成されている。その主な特徴としては、個別面接により子どもから得られた反応を得点化できる点にあり、2件法に比べて、より子どもの発達に即した検討を行っているといえる。しかし、項目数が多く、その内容に「死んだ人をお墓に埋めたら生き返りますか-死んだ人をお墓に埋めなかったら生き返りますか」といったものが含まれており、文化社会的な差異の問題点が残されている。

そこで本研究では、DDCQを参考に項目および得点化の基準を作成し、子どもの反応を得点化することで、幼児期にある子どもが生物学的な死を正確に理解しているかどうかという死の概念獲得の過程を実証的に検討することを目的とする。具体的には、3歳から6歳までの幼児期の子どもを対象とし、不動性、不可逆性、普遍性の3つの死の概念に加え、死後観および死に対するイメージについて調査を行い、その発達の变化ならびに、死の概念と死後観および死に対するイメージとの関連について検討していく。本研究の結果は、現在、注目が集まっている「いのちの教育」を実践していくために必要な諸データを提供するとともに、子どもの死の概念の発達や生命に対する理解を考えるうえで、有意義であると考えられる。

2. 方法

2-1. 調査時期ならびに調査場所

2007年10月から12月にかけて、大阪府内にある浄土系の仏教寺院が運営する私立幼稚園で行った。この幼稚園は大阪府の郊外に位置し、周辺では新しい住宅地の開発が進んできているが、古くからの住宅地も多く、比較的落ち着いた環境のなかに立地している。

2-2. 調査対象児

調査に先立って、全園児234名の保護者に子どもを調査に参加させてよいかどうかについての判断を書面

にて求め、調査の許可がおりた192名(82%)の子どもを調査対象児とした。最終的に、集中力が持続せず調査を途中で中断した子どもや調査当日に欠席した子どもなどを除いた177名(76%)を分析対象とした。

その内訳は、年少児(3歳児クラス)53名(男児24名,女児29名,平均月齢50.36か月,SD=3.25,範囲3歳8か月~4歳7か月),年中児(4歳児クラス)45名(男児28名,女児17名,平均月齢61.16か月,SD=3.55,範囲4歳8か月~5歳7か月),年長児(5歳児クラス)79名(男児42名,女児37名,平均月齢73.57か月,SD=3.60,範囲5歳8か月~6歳7か月)であった。

2.3. 調査材料

本研究は3歳児を含む幼児を対象としているため、子どもが死をイメージしやすいように、人間の死を主題とした『おばあちゃんがいるといいのにな(松田素子作,石倉欣二絵,ポプラ社,1994)』という絵本を紙芝居にして使用した。この絵本の前半では、主人公である「おばあちゃん」とその孫である男の子との交流が描かれ、後半に「おばあちゃん」が病気で亡くなるという内容であった。本研究で使用した質問項目については、「死んじゃったおばあちゃんは…」、「おばあちゃんは死んじゃったけど…」、「紙芝居にでてきた男の子は…」といったように、この紙芝居の内容を反映させた。

この絵本を採用した理由として、内容に回想場面などが含まれておらず単純な構成であり、死をテーマにした絵本であるにもかかわらず幼児にとって物語内容の理解がしやすいと考えられたためであった。紙芝居の構成については、調査内容に影響があると思われる場面などについては省略し、子どもの集中力を考慮して10場面とした。なお、紙芝居の大きさはA2サイズ、全てカラーであった。

2.4. 調査手続き

調査方法は個別面接により行った。筆者以外の調査員として、教育心理学を専攻し、小学校でフィールドワーク経験のある学部生、大学院生の男女10名(男性1名,女性9名)に調査の協力を依頼した。調査は朝の自由保育の時間を利用し、面接可能な園舎内の一室で行った。子どもと調査員との会話はテープに録音して、後ほど逐語記録した。調査の所要時間は、紙芝居の読み聞かせを含めて、1回につき20~25分程度であった。

調査の手順として、教室に対象児を約10名ずつ招き入れ、各調査員が対象児1名と組になり、向かい合わせで座った状態となった。そして、全ての調査員と子どもの組が座った状態にあることを確認してから、筆者が前に出て紙芝居を読み聞かせた。

紙芝居が終了してから、子どもの名前、クラス名、誕生日、年齢の確認を行った後、子どもと親和関係を結ぶため、しばらくの間、自由に話す時間を設けた。そして、子どもが自発的に会話をするようになったのを確認してから、「お姉さん(お兄さん)から[対象児名]ちゃんにいくつか簡単な質問があるんだけど、[対象児名]ちゃんが思った通りに答えてね」と教示し、質問を行った。なお、本調査は死を主題とした内容であったため、その日の調査が終了した後は、お昼休みや放課後の時間を利用して子どもたちと一緒に遊び、楽しい時間をもつよう心がけた。

2.5. 調査内容と得点化

質問項目については、Development of Death Concept Questionnaire: DDCQ (Smilansky, 1987)を参考に、死の不動性(死んだら生命活動が停止する)、死の不可逆性(死んだら生き返らない)、死の普遍性(誰でも死ぬ)の3つの概念に関する項目を作成した。また、得られた反応を得点化するための基準についても、同

じくDDCQのスコアリングマニュアルを参考に作成した。得点化に際しては、教育心理学を専攻する大学院生1名とともにを行い、意見が異なった際には、話し合ったうえで得点を決定した。

また、その他の項目として、「死んじゃったおばあちゃんはこれからどうなるのかな？」という死後に關するものと、「『死ぬ』って聞いてどんなことを思い浮かべるのかな？」という死に対するイメージの2つの質問を行った。

① 死の不動性

死の不動性とは、生命活動の停止という死の特性を表した概念である。具体的な項目内容は、「死んじゃったおばあちゃんは、動きますか？」という可視的な身体機能の停止に関する項目と「死んじゃったおばあちゃんは、泣いたり、笑ったりするのかな？」という不可視的な感情機能の停止に関する項目の2つであった。

そして、それぞれの質問の後に、「なぜそう思うのか」という理由の説明を求めた。期待される理由説明としては、「死んでいるから」、「もうできないから」などとした。加えて、「TVでみた」、「飼っていた犬がそうだった」などの対象児の経験についても正解とした。また、妥当ではない理由説明としては、「しんどいから」、「血が出るから」、「分からない」などとした。

なお、DDCQのスコアリングマニュアルでは、「たおれるから」、「天国（お空）にいったから」、「病院にいったから」といった理由説明は期待される答えに含まれていない。しかし、言葉で表現する能力が未熟な幼児期の子どもにとって、これらの説明は「死」と同義語として表現されている可能性があるため、本調査においては正解とした。ただし、「天国（お空）にいったから」といった死後に關する表現が含まれている場合は、「死んだらどうなるのか？」という質問項目に対する答と一致していること、「病院にいったから」といった理由説明の場合は、「死んで病院にいった」というように、「死」という言葉が含まれていることを条件とした。

また、不可視的な感情機能の停止に関する質問に対して、「笑わないけど、泣いてしまう」という反応がいくつか認められた。これについては、紙芝居に登場するおばあちゃんが「泣く」のではなく、そういった回答をした子ども自身が「泣く」という意味であったと考えられる。そのため、質問に対する答としては正解とし、理由説明についても、「悲しいから」などの回答があった場合には妥当なものであると判断した。

得点化の基準は、質問に対する正解の数と妥当な理由説明の数との組み合わせによって決定した（Table1）。2つの質問に対して、ともに「そうしない」と答え、かつ、その理由説明がともに妥当なものであった場合を3点とした。2つの質問ともに「そうしない」と答え、その理由説明のうちの1つが不正解の場合を2点とした。質問に対する答えとその理由説明がともに1つずつ正解の場合と、質問に対する答えのみともに正解の場合を1点とした。そして、それ以外の組み合わせを0点とした。

Table 1 死の不動性における得点化の基準

得点	質問に対する正解の数	Plus	期待される理由説明の数
3点	2	+	2
2点	2	+	1
1点	1	+	1
	2	+	0
0点	1	+	0
	0	+	0

② 死の不可逆性

死の不可逆性とは、死の状態から生の状態には戻らないという死の特性を表した概念である。具体的な項目内容は「おばあちゃんは死んじゃったけど、生き返るかな?」であった。そして、この質問を行った後、その反応（「生き返らない」、「生き返る」）によって質問項目を変更し、得点化を行った。

まず、「生き返らない」と答えた場合、「それじゃあ、おばあちゃんを生き返らせることはできるかな?」と生き返りの可能性について尋ねた。ここでの質問に対し「できない」と答えた場合は3点、「できる」と答えた場合は2点とした。

次に、最初の質問において、「生き返る」と答えた場合は、「それじゃあ、死んだままの人っているかな?」と尋ねた。ここでの質問に対し、対象児が生き返らない対象を有している場合は1点、「分からない」と無回答を含めたそれ以外の回答については0点とした。

③ 死の普遍性

死の普遍性とは、生命には必ず死がおとずれるという死の特性を表した概念である。具体的な項目内容は、「紙芝居にでてきた男の子は、いつかおばあちゃんみたいに死ぬのかな?」であった。そして、死の不可逆性の得点化の場合と同様に、この質問を行った後、その答え（「死ぬ」、「死なない」）によって、質問項目を変更し、得点化を行った。

まず、「死ぬ」と答えた場合、「それじゃあ、死なない人っているのかな?」と子どもが死なない例外を認めていないかどうか確認した。ここでの質問に対し「いない」、「誰でも死ぬ」と答えた場合は3点、「自分は死なない」、「家族は死なない」、「TVのヒーローは死なない」など、例外を認めている場合は2点とした。なかには、「神様は死なない」、「お化けは死なない」といった反応が認められ、判断に迷うところであるが、本研究では子どもが死なない例外を認めているとして2点とした。

次に、最初の質問において、「死なない」と答えた場合は、「それじゃあ、おばあちゃんみたいに死んじゃう人っているのかな?」と尋ねた。ここでの質問に対し、対象児が何らかの死ぬ対象を有している場合は1点、「分からない」と無回答を含めたそれ以外の回答については0点とした。

3. 結果

3-1. 死の概念の得点結果および学年差

3つの死の概念について、子どもから得られた反応を得点化し、学年ごとの中央値と四分位偏差、平均値と標準偏差を示したものをTable2、学年ごとの各得点に占める人数の割合をFigure1~3に示す。

学年ごとの発達差を確認するために、それぞれの死の概念得点を従属変数、学年を独立変数としたKruskal-WallisのH検定を行った。その結果、不動性、普遍性、3つの死の概念の合計得点については有意な差がみられ（不動性： $\chi^2(2, N = 177) = 8.18, p < .05$ 、普遍性： $\chi^2(2, N = 177) = 33.20, p < .001$ 、合計得点： $\chi^2(2, N = 177) = 33.12, p < .001$ ）、不可逆性については有意な差が認められなかった（ $\chi^2(2, N = 177) = 0.33, n.s.$ ）。そこで、有意差がみられた2つの概念と合計得点について、Steel-Dwassによる多重比較を行ったところ、不動性については、年少児と年長児の間に有意な差がみられ（ $p < .05$ ）、普遍性と合計得点については、年少児と年中児、年中児と年長児、年少児と年長児の間に有意な差が示された（ $p < .001$ ）。

まず、不動性では、0点および1点の占める割合が、年少児では43%、年中児では31%、年長児では20%と減少傾向にあり、2点および3点の占める割合が、年少児では57%、年中児では69%、年長児では80%と増加傾向にあるものの、年少児と年長児との間に有意な差がみられただけで、明確な発達差は示されなかつ

た。また、月齢との相関係数（Kendallの順位相関係数）を算出したところ、 $\tau = 0.19$ ($p < .01$) と弱い正の相関となっており、幼児期においては目立った概念の獲得が行われていないことが示された。

次に、不可逆性では、得点の分布に大きな偏りが認められた。0～2点の子どもは、0点が年中児2名、1点が年少児2名と年長児1名、2点が年少児5名、年中児3名、年長児7名の合計20名のみであった。3歳児を含む年少児から年長児の約85%以上が「死んだら生き返らない」と答えており、この結果から、不可逆性は、他の2つの死の概念よりも獲得が容易な概念であることが示された。

最後に、普遍性では、年少児よりも年中児、年中児よりも年長児の得点が有意に高いという明確な発達差がみいだされた。0点および1点の占める割合が、年少児では74%、年中児では60%であるのに対し年長児では27%、2点および3点の占める割合が、年少児では26%、年中児では40%であるのに対し年長児では73%と、とくに年長児において概念の獲得が進んでいることが分かる。月齢との相関係数（Kendallの順位相関係数）を算出したところ、 $\tau = 0.35$ ($p < .01$) と中程度の正の相関であることから、年齢とともに、普遍性の概念獲得が進むという結果となった。

Table 2 死の概念の得点結果

	不動性	不可逆性	普遍性	合計点
年少児 (N=53)	2.00 (1.00) ----- 1.83 (1.07)	3.00 (0.00) ----- 2.83 (0.47)	0.00 (1.00) ----- 0.87 (1.13)	6.00 (1.00) ----- 5.53 (1.61)
年中児 (N=45)	3.00 (1.00) ----- 2.18 (0.94)	3.00 (0.00) ----- 2.80 (0.66)	1.00 (1.25) ----- 1.22 (1.24)	6.00 (1.00) ----- 6.20 (1.80)
年長児 (N=79)	3.00 (0.50) ----- 2.34 (0.92)	3.00 (0.00) ----- 2.89 (0.36)	3.00 (1.00) ----- 2.14 (1.17)	8.00 (1.50) ----- 7.37 (1.77)

注) セル内上段：中央値（四分位偏差） セル内下段：平均値（標準偏差）

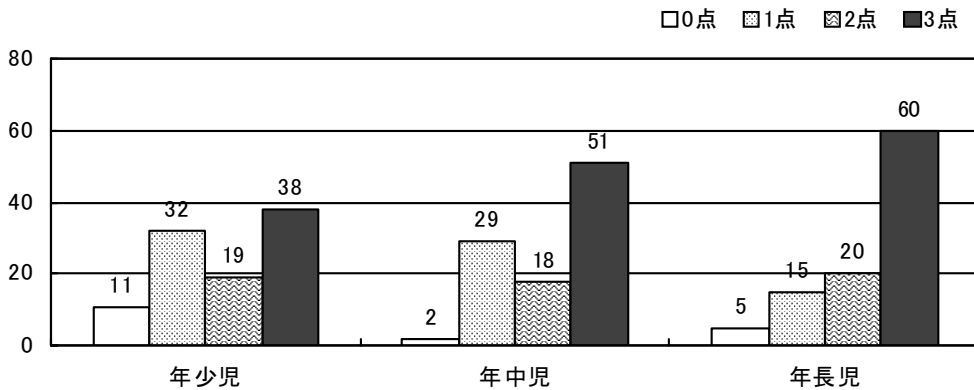


Figure 1 死の不動性 学年ごとの各得点に占める割合 (単位：%)

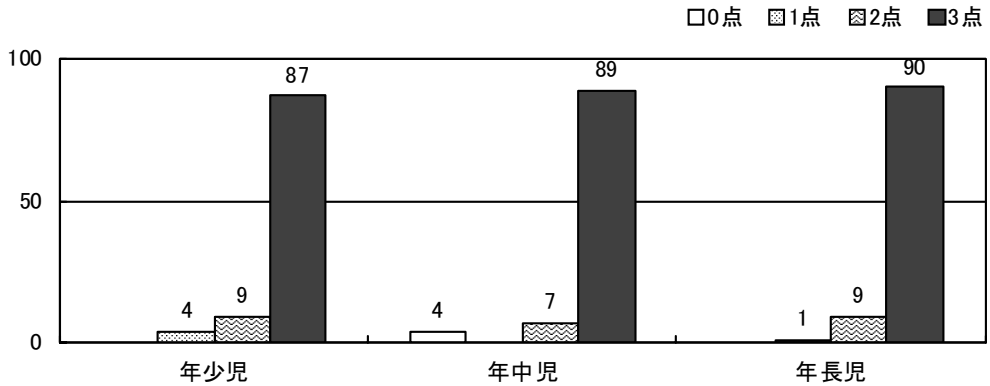


Figure 2 死の不可逆性 学年ごとの各得点に占める割合 (単位：%)

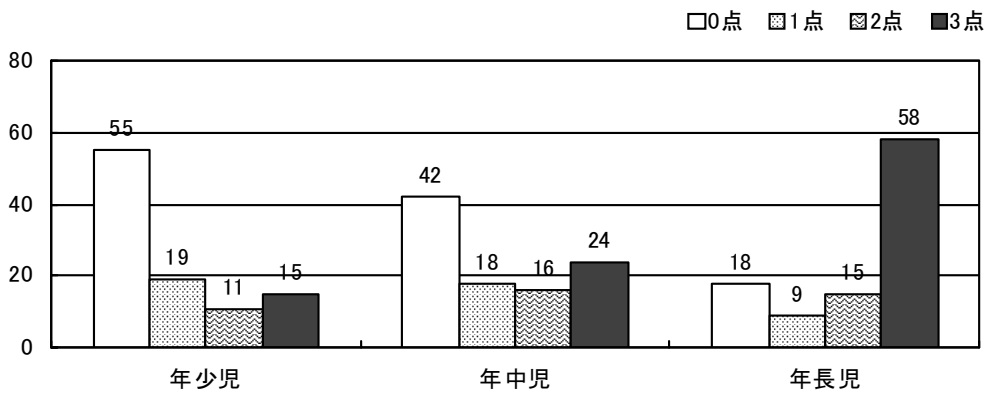


Figure 3 死の普遍性 学年ごとの各得点に占める割合 (単位：%)

3.2. 死後観および死に対するイメージの集計結果

死後観および死に対するイメージの質問項目について、子どもから得られた反応をカテゴリー化し、学年ごとにクロス集計したものがTable3である。

まず、死後観の「来世に関する表現」とは、「天国に行く」、「お空に行く」、「お星様になる」など、「死後の生」についての反応をまとめたもの、「死の現実的な表現」とは、「お墓にはいる」、「骨になる」、「焼く」、「死んだまま」、「いなくなる」など、死を現実的に捉えた反応をまとめたもの、「生と死の未分化」とは、人間の行動に関する表現を含んだ反応をまとめたものである。なお、「生と死の未分化」のなかで最も多かった反応は「病院に行く (37名)」であり、子どもがこういった回答をした場合には、「おばあちゃんは死んじゃったんだけど、病院に行くの?」といったように再度確認を行ったが、回答を変更した子どもはいなかった。そして、「分からない」という特定の回答を示さない反応を加え、以上のような4つのカテゴリーを生成した。

次に、死のイメージの「否定的な感情」とは、「悲しい」、「可哀想」、「いや」といった反応と、「泣く」、「会えなくなる」などの否定的な感情を喚起させるような表現を含んだ反応をまとめたもの、「その他の回答」とは、単に「死ぬ」といったものや個人的な経験に関するものなど上記以外の反応をまとめたもの、「生と死の未分化」とは、死後観の「生と死の未分化」と同様の反応に加え、内容を特定できなかった反応をまとめたものである。そして、「分からない」という特定の回答を示さない反応を加え、以上のような4つのカ

テゴリーを生成した。

カテゴリー化の結果から、死後観については、「来世に関する表現」と「死の現実的な表現」のように生と死が弁別されたものと、「生と死の未分化」のように生と死が弁別されていないものの2つに大別できる。そして、死のイメージについては、「否定的な感情」と「分からない」の2つのカテゴリーが全体の80%（140名）を占めていることから、子どもが死に対して否定的な感情を表出できるかどうかを検討することができる。Table3のクロス集計表を参照すると、年齢とともに、「来世に関する表現」と「死の現実的な表現」に占める人数の割合が高くなり、逆に「生と死の未分化」では低くなる傾向がみられ、「否定的な感情」については年長児の占める割合が高くなっている。

そこで、死後観およびイメージと学年との関連をみると、Cramerの連関係数の値がともに約0.35と十分な関連を示しており、カイ二乗値も0.1%水準で有意であった（死後観と学年： $\chi^2(6, N = 172) = 39.97, p < .001, V = 0.34$ 、イメージと学年： $\chi^2(6, N = 165) = 41.87, p < .001, V = 0.36$ ）。以上の結果から、年齢とともに、生と死が弁別された表現を使用するようになり、死に対して否定的な印象をもつようになるという発達的な変化がみいだされた。

Table 3 死後観ならびに死に対するイメージのカテゴリー別集計

質問項目	カテゴリー	年少児 (n=49)	年中児 (n=45)	年長児 (n=78)	合 計
死後観	来世に関する表現	6 (11%)	11 (20%)	39 (70%)	56
	死の現実的な表現	6 (14%)	13 (31%)	23 (55%)	42
	生と死の未分化	24 (50%)	14 (29%)	10 (21%)	48
	分からない	13 (50%)	7 (27%)	6 (23%)	26
N=172 (無回答であった5名を削除)		V=0.34 p<.001			
質問項目	カテゴリー	年少児 (n=44)	年中児 (n=42)	年長児 (n=79)	合 計
死のイメージ	否定的な感情	14 (17%)	14 (17%)	53 (65%)	81
	その他の回答	6 (43%)	5 (36%)	3 (21%)	14
	生と死の未分化	10 (91%)	1 (9%)	0 (0%)	11
	分からない	14 (24%)	22 (37%)	23 (39%)	59
N=165 (無回答であった12名を削除)		V=0.36 p<.001 (VはCramerの連関係数)			

3.3. 死の概念と死後観および死のイメージとの集計結果

得点の分布に大きな偏りが認められた不可逆性を除く2つの死の概念得点について、0点と1点を得点低群、2点と3点を得点高群とカテゴリー化し、死後観およびイメージとのクロス集計したものがTable4である。

このクロス集計表から、概念得点高群の「来世に関する表現」、「死の現実的な説明」、「否定的な感情」に占める人数の割合が低群よりも高くなる傾向がみられる。そこで、この2つの変数間の関連性（Cramerの連関係数）を検討すると、不動性とイメージ（ $\chi^2(3, N = 165) = 13.52, p < .01, V = 0.29$ ）、普遍性と死後観（ $\chi^2(3, N = 172) = 9.48, p < .05, V = 0.24$ ）、普遍性とイメージ（ $\chi^2(3, N = 165) = 19.70, p < .001, V = 0.35$ ）と

の間に関連が認められた。死の概念と死後観については、不動性との間には関連がみられず ($\chi^2(3, N = 172) = 5.29, n.s., V = 0.18$)、普遍性との間にのみ関連がみられたものの、5%水準で十分な関連は示されなかった。つまり、概念を獲得することと、生と死が弁別された適切な回答をすることとの間に積極的な関連が認められないという結果となった。

その一方で、死の概念とイメージの関連について、不動性と普遍性ともに関連が認められた。とくにイメージと普遍性との間に、0.1%水準で十分な値が示されている。つまり、子どもの概念獲得のうち、とくに「誰でも死ぬ」という普遍性の概念獲得が進むほど、「否定的な感情」という死に対して否定的な印象をもつことが示された。

Table 4 死の概念と死後観および死のイメージとの集計結果

カテゴリー	不動性		普遍性		合計	
	低群	高群	低群	高群		
死後観 (N=172)	来世に関する表現	13(23%)	43(77%)	21(38%)	35(63%)	56
	死の現実的な表現	10(24%)	32(76%)	17(41%)	25(60%)	42
	生と死の未分化	15(31%)	33(69%)	29(60%)	19(40%)	48
	分らない	12(46%)	14(54%)	17(65%)	9(35%)	26
		V=0.18		V=0.24*		
死のイメージ (N=165)	否定的な感情	15(19%)	66(82%)	25(31%)	56(69%)	81
	その他の回答	6(43%)	8(57%)	7(50%)	7(50%)	14
	生と死の未分化	7(64%)	4(36%)	9(82%)	2(18%)	11
	分らない	22(37%)	37(63%)	37(63%)	22(37%)	59
		V=0.29**		V=0.35***		
* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ (VはCramerの連関係数)						

4. 考察

4.1. 死の概念, 死後観, 死のイメージの発達的变化

本研究では、幼児期の子どもを対象に、死の不動性(死んだら機能が停止する)、死の不可逆性(死んだら生き返らない)、死の普遍性(誰でも死ぬ)の3つの死の概念に加え、死後観、死のイメージについて調査を行い、子どもが生物学的な死を正確に理解しているかどうかについて、その発達的变化を実証的に検討した。

その結果、3つの死の概念のうち、不動性と普遍性について、そしてその他の項目として死後観および死のイメージについて、年齢による発達的变化がみいだされた。ただし、不動性については、年少児と年長児との間に有意な差がみられたものの、明確な発達差は認められず、また月齢との相関係数も低かった。つまり、この不動性は、3歳から6歳という幼児期において、とくに目立って発達するものではなく、緩やかに獲得されていく概念であることが分かる。

その一方で、普遍性については、年少児よりも年中児、年中児よりも年長児という明確な発達差が認められ、月齢との相関についても十分な値を示した。そして、死後観および死のイメージについても、年齢とともに、生と死が弁別された表現を使用するようになり、死に対して否定的な印象をもつようになるという発達的变化がみいだされた。とくに、普遍性における年長児の3点に占める割合、死後観の「来世に関する表現」、「死の現実的な表現」、死のイメージの「否定的な感情」における年長児の占める割合が、他の学年と

比較して高いことから、5歳から6歳にかけてのこの時期に死に対する理解が進むと考えられる。3歳から13歳までの205名の子どもを調査した仲村（1994）も、5歳から6歳の間に、死の普遍性、死後観といった死に対する認識が大きく変化すると報告しており、本研究の結果と一致している。

次に、不可逆性については、3点の子どもが157名（89%）、0点から2点までの子どもが20名（11%）と、年少児から年長児までのほとんどの子どもが不可逆性の概念を獲得しているという結果となった。仲村（1994）の調査でも、「死んだ人は生き返れますか」という質問に対して、3歳から5歳までの45名の子どものうち、「生き返れない」と答えたのが32名（71%）、「生き返れる」と答えたのが13名（29%）と報告しており、子どもにとって概念の獲得が容易であることが分かる。DDCQを使用した先行研究においても、不可逆性が他の概念と比較して獲得しやすいという結果が得られている（Orbach, Gross, Glaubman & Berman, 1986; Orbach, Talmon, Kedem & Har-even, 1987）が、本研究の結果から、3歳児を含む幼児期の初期であっても、概念の獲得がなされていることが示された。

子どもの死の概念獲得の時期については、5歳から7歳頃の間には、本研究で採用した3つの概念をほとんどの子どもが獲得しているとされている（Lansdown & Benjamin, 1985; Speece & Brent, 1984）。しかし、それ以前の4歳までに、死が状態に変化をもたらすことを子どもが理解しているという指摘もなされている（Kenyon, 2001）。本研究からも、一部の概念については4歳前後から獲得されており、5歳から6歳頃になると3つの概念に加え、「悲しい」、「イヤ」といった否定的な感情を含めた包括的な理解が行われるという結果を示唆するものとなった。

4.2. 死の概念と死後観および死のイメージとの関連

死の概念とその他の項目との関連を検討したところ、まず、死の概念と死後観との間に積極的な関連はみられなかった。本来、死の意味を理解しているならば、死後観についての質問に対して、適切な表現ができるはずである。しかし、結果から、死の概念を獲得することと、生と死が弁別された適切な表現を知っていることとはあまり関連づけられていないという結果が示された。次に、死の概念と死のイメージとの関連については、不動性と普遍性ともに関連が認められ、死の概念獲得を理解するうえでも重要な指標であることが示された。とくに、自分自身を含めて誰でもいつかは死ぬという普遍性との間に強い関連が認められたことは、他者の死を悼み、悲しむという感情を育てていくうえでも注目すべき点であると考えられる。

ただし、不動性と死後観との関連について、概念得点高群の「生と死の未分化」に占める人数の割合が低群よりも高くなっていることに注意する必要がある。この結果について、「生と死の未分化」には「病院」という反応が多く含まれており、不動性を得点化する際の基準としてこの反応を採用したためと考えられる。しかし、この「病院」という反応には、「病院にいけば治してもらえる（動くようになる・生き返る）」という意味が含まれている可能性も否定はできない。結果から、死の概念と死後観との間に積極的な関連は認められなかったが、とくに年少児のような幼い子どもの概念獲得を理解する際には、死後観などの項目と合わせて慎重に検討していくことが必要である。

5. 課題と展望

本研究の課題として、まず、得点化する際の基準を改善する必要がある。不動性については、DDCQを参考に「なぜ、そう思うのか」という自由発話を重要な基準としたのに対し、不可逆性と普遍性については、「できる－できない」、「いる－いない」といった簡単な発話のみを基準としたため、その基準が統一されていない。幼い子どもを対象に自由発話を用いる場合、子どもの言語能力に依存するという問題が生じる。その一

方で、「Yes-No」のような簡単な発話を基準とする場合、子どもにとって獲得しやすい不可逆性のような概念では、その得点に大きな偏りがみられてしまう。そのため、こういった問題を解決するような、質問項目や得点化の基準を検討する必要がある。

次に、死後観における「死の現実的な表現」には「お墓にはいる」、「骨になる」、「焼く」といった反応が含まれていたが、これらの反応に、子ども自身の葬儀などへの参列経験が反映されている可能性がある。そういった経験が、死の概念の獲得に影響しているという報告 (Reilly, Hasazi & Bond, 1983) もあるため、今後の調査において検討していく必要がある。

また、子どもを対象とした死の不安や恐怖に関する研究が少ないという指摘がある (Prichard & Epting, 1991-1992)。本研究では、子どもが死に対して否定的な感情を表出できるかどうかを、死のイメージにおける「否定的な感情」を用いて検討したが、幼児期の子どもを対象とした死の不安に関する調査を行うための調査方法などさらなる検討が望まれる。

【引用文献】

- Brent, S.B. & Speece, M.W. 1993 "Adult conceptualization of irreversibility: Implications for the development of the concept of death", Death Studies, Vol.17, pp.203-224.
- Kenyon, B.L. 2001 "Current research in children's conceptions of death: A critical review", OMEGA: Journal of Death and Dying, Vol.43(1), pp.63-91.
- Lansdown, R. & Benjamin, G. 1985 "The development of the concept of death in children aged 5-9 years", Child Care, Health, and Development, Vol.11(1), pp.13-20.
- 長崎県教育委員会学校教育課 2005 児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査
- 仲村照子 1994「子どもの死の概念」『発達心理学研究』5-1, 61-71頁
- Orbach, I., Gross, Y., Glaubman, H. & Berman, D. 1986 "Children's perception of various determinants of the death concept as a function of intelligence, age, and anxiety", Journal of Clinical Child Psychology, Vol.15(2), pp.120-126.
- Orbach, I., Talmon, O., Kedem, P. & Har-even, D. 1987 "Sequential patterns of five subconcepts of human and animal death in children", Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, Vol.26(4), pp.578-582.
- Prichard, S. & Epting, F. 1991-1992 "Children and death; New horizons in theory and measurement", OMEGA: Journal of Death and Dying, Vol.24(4), pp.271-288.
- Reilly, T.P., Hasazi, J.E. & Bond, L.A. 1983 "Children's conceptions of death and personal mortality", Journal of Pediatric Psychology, Vol.8(1), pp.21-31.
- Schonfeld, D.J. & Smilansky, S. 1989 "A cross-cultural comparison of Israeli and American children's death concept", Death Studies, Vol.16, pp.174-189.
- Smilansky, S.N. 1987 On Death: Helping Children Understand and Cope, Peter Lang Publishing.
- Speece, M.W. & Brent, S.B. 1984 "Children's understanding of death: A review of three components of the concept of death", Child Development, Vol.55, pp.1671-1686.
- Speece, M.W. & Brent, S.B. 1992 "The acquisition of a mature understanding of three components of the concept of death", Death Studies, Vol.16(3), pp.211-229.
- Wenestam, C.G. & Wass, H. 1987 "Swedish and U.S. children's thinking about death; A qualitative study and cross-culture comparison", Death Studies, Vol.11, pp.99-121.

【付記】

調査実施するにあたり、ご協力いただきました幼稚園の関係者のみな様、調査員として調査に協力してくれた教育心理学講座の学部生、大学院生のみなさん、とくに答えにくい質問に一生懸命考えて答えてくれた園児のみな様に厚く御礼申し上げます。

また、本研究の一部は、日本発達心理学会第19回大会（2008）のラウンドテーブル「宗教性発達研究の展開（1）—日本人の宗教性発達を考える—」，XXIXth International Congress of Psychology（2008）および日本教育心理学会第50回総会（2008）のポスター発表で発表しました。

なお、本研究は、大阪大学人間科学研究科・組織的な大学院教育推進プログラム「人間科学データによる包括的専門教育」、平成19年度大学院学生データ収集・解析支援基金の支援を受けて実施されました。

The development of the concept of death in early childhood

TSUJIMOTO Tai

This study aims to examine the development of the concept of death in early childhood. One hundred and ninety two children in the age range of 3–6 years were interviewed individually about death concepts such as finality (all life-sustaining functions cease with death), irreversibility (once dead, a person cannot become alive again), universality (everyone dies), the belief in after life, as well as the image of death. The following results were obtained: irreversibility was acquired around the age of 3–4 years, inclusive understanding of death was facilitated around the age of 5–6 years when children could use expressions in which life and death were divided and they could understand emotions such as “sad” and “disgust.” Further, although no strong relationship between the concept of death and the belief in after life was detected, universality and negative emotions were strongly correlated. This finding suggested that the emotional aspect was one of the most important factors for understanding children’s acquisition of the concept of death.